ロシアにおける地域史の問題

はじめに

一九九〇年にモスクワで発刊された『祖国。地域研究アルマナク』は年一回、四六版三〇〇頁前後の一般読書人向けの雑誌である。編集に当たっているのは著名な歴史学者にして古文獻学者C・O・シュミットを始めとする学者たちだから、雑誌は半ば学問的な性格を帯びているということが出来るだろう。一九九五年からは年二回の刊行となり、現在まで二〇冊を数えるが、ここでは「地域(クライ)」をめぐるとさまざまな話題が取り上げられている。具体的な「地域」の歴史に関する特集、文学作品の舞台となった「地域」についての細かな情報、あるいは入手困難な古い貴重な論文の転載など、この分野では貴重な雑誌となつて

いる。

土 肥 恒 之

ところでこの雑誌の四号(一九九三)の「地域研究の黄金のフォンド」欄にM・M・ボゴスロフスキー「ロシアの地方史、その学問的根拠と現代的諸課題」という短い論文が掲載されている。この論文は一九二一年一二月にモスクワで行われた「地域研究協会」の全ロシア会議での講演の記録であつて、当時協会の雑誌に掲載されたのだが、少数しか印刷されなかつた。それ以上に歴史学をめぐると状況が一変したためにこれまでほとんど知られていなかったものである。小稿の目的はボゴスロフスキー論文を手掛かりとして、「十月革命」前のロシアにおける地域史研究の問題についてささやかな考察を試みることにあるが、はじめに地域史研究の「復活」について、ごく簡単に見ておくこ

とにしたい。

ソ連邦が崩壊して一〇年余、ベレストロイカの始まりから数えるとするで一五年以上が過ぎた。それまで直接間接に「政治」のくびきの下にあったロシアの歴史学は、大きな変化のときを迎えている。一口で言ううと「歴史の見直し」「書き直し」ということになるが、そうした動向についてはわが国でも様々な形で紹介されている。筆者も三年前に「十月革命」をはさむ二〇世紀前半のロシアの史学史の問題について検討を試みたことがある。けれどもこれまでわが国でほとんど紹介されていない、だが大変興味深い動向として地域史研究の復活という問題がある。「地域」といっても市町村、郡、県あるいは更に大きな地区などのレヴェルがあるが、いま全国の県(州)を中心にして歴史団体が形成され、「スタリナー」つまり「往古」という名称を掲げた地域雑誌が各地で発刊されている。さらに新しく通史が纏められているのである。最初に言及した『祖国』誌の刊行もそうした流れのなかで理解できるし、その他にも『ロシアのプロヴィンツィア』(隔月刊)という大判のグラビア誌なども、「地域」とその歴史への関心の高まりを反映したものと見るができるだろう。ロシ

アは歴史的に中央権力が強大で、ドイツなどヨーロッパの国々とは異なって「地域主義の伝統」が弱い。それに比例して地域史研究もきわめて低調で、その歴史も浅いと言わなければならない。それでも帝政末期に地域研究団体が組織され、定着していたのだが、その動きも「十月革命」とその後の「政治」によって断ち切られた。地域史の定義にもよるが、ソ連邦の時代には組織にしても、研究にしてもほとんど見るべきものがなかったと言っても過言ではない。したがって最近十年余の動向は帝政時代の伝統の「復活」と見ることが出来るのである。

本稿で紹介するボゴスロフスキー論文は、「十月革命」間もない時期に書かれたものであり、しかも彼はモスクワ大学ロシア史講座教授という地位にあった。その点だけでも興味をそそられるのだが、次節ではまず彼のロシア史研究について基本的な性格を見ることにしよう。

一 ボゴスロフスキーのロシア近代史研究

ミハイル・ミハイロヴィチ・ボゴスロフスキーは一八六七年にモスクワで生まれ、終生そこを離れることはなかった典型的なモスクヴィチである。一八八六年にモスクワ大

学歴史・文献学部に入學した彼は帝政期最も優れた歴史家 B・O・クリュチエフスキー（一八四一—一九一一）の強い影響の下に大学に残り、ロシア近代史の研究に入ったのである。一九〇二年に提出された修士論文のタイトルは『ピョートル大帝の地方改革。一七一九—一七二七年のプロヴィンツィア』であった。ロシアの「西欧化」に向けて大きく舵を切ったピョートル改革はロシア史のなかでも最も議論の多いテーマの一つだが、ボゴスロフスキーはその地方改革について初めて精緻な分析を加えたのである。彼によると、改革は何よりも一七一—一八世紀はじめにかけての「ヨーロッパ共通の現象」であった「全般的福祉」、「合理主義」、絶対主義的並びに「規制的」行政国家のイデーに導かれていた。改革は自己の臣民をあらゆる後見によって包みこんだ。つまり生産活動は細部にわたって規制され、日常生活のあらゆる側面に干渉した。家計支出、娯楽さえも例外ではなかった。こうした一連の政策によって、ピョートルとその政府は「古ルーシ」の古い諸慣行とたたかい、それを容赦なく根絶しようとしたが、それらはずべて先のイデーに導かれていたというわけである。

ボゴスロフスキーはこうした改革論に立って、ピョートル

ルの地方改革について解明を進めた。一七世紀のロシアは二五〇もの小さな郡に区分されていて、中央から派遣される地方長官が郡の行政と軍事の全権を握っていた。ピョートルはそうした「古ルーシ」の行政に代えて、新しく西欧の行政組織を持ち込もうとした。ロシアにはじめて県制（八県、後に一一県）を導入したのに続いて、一七一九年にはその県の下に新しい行政単位として四五の「プロヴィンツィア」を導入した。「プロヴィンツィア」自体、人工的な区分であったが、さらに各プロヴィンツィアは「ディストリクト」という一〇〇〇世帯から一五〇〇世帯を目安とした地区に細分された。そうした行政組織の画一化とともに、裁判を行政から切り離すというきわめて斬新な改革に踏み込んだ。ボゴスロフスキーはこうした地方改革が一体どのような意図に拠るものなのか、実際にどのように進められ、そして途中でどのような変更を余儀なくされたのかなどについて深く分析を進めたのである。その過程でロシアの地方行政の乱脈ぶりが明らかにされるとともに、ピョートル末期の経済の破たん、同時に導入された人頭税の重さ、あるいは地方貴族の勤務忌避などについての多数の貴重な資料がはじめて掘り起こされた。ピョートル後の

地方行政史を分析したH・B・ゴーチエによると、ピョートルの地方改革は「翼もなしに大空に飛立とうとする試み」となるが、ボゴスロフスキーはその失敗についても様々な原因を具体的に分析したのである。

本書は特定の地域に焦点を絞った分析、つまり狭い意味での地域史研究というわけではない。ボゴスロフスキーが検討した史料はきわめて広汎で、分析された地域は全国に及んでいる。したがって地域を特定して個別的に見るならば、彼の指摘が当たらない部分、あるいは別の側面が明らかにされる可能性はそれとして残されているだろう。だがこのテーマに関して、一世紀前に刊行された本書を越える研究は現在も現れていない。ピョートル研究において古典的にして、避けて通ることのできない不可欠な基本文献、本書はそうした名誉ある地位を占めているのである。

ボゴスロフスキーは、この論文で修士の学位を取り、引き続き一八世紀ロシア史について多くの論文や概説を書き、小冊子を刊行した。だがその後一七世紀北ロシアの国有地の郷に焦点をあわせていった。一九〇九年に発表した博士論文『一七世紀のロシア北部における地方自治』第一巻がそれで、第二巻は一九一二年に刊行された。合わせて本文

六三〇頁、付録一五〇頁の大きな研究であるが、第一巻のサブ・タイトルは「沿岸地方の分割、土地所有と社会体制、自治の諸機関」第二巻は「ミールの活動、ゼムストヴォと国家」とされている。この著作についても、その内容と意義について簡単に見ることにしよう。

全体を通して、ボゴスロフスキーは北部ロシアの経済的社会的慣習を注意深く考察し、土地所有、分与地と割替の諸問題、農民層の分化などについて分析している。北部の国有地において農民が自らを土地の所有者と見なしていたのに、国家は農民を単に保有者と見ていたこと、つまり所有権の二重の性格について初めて指摘された。また北部における郷の複雑な性格についても明らかにしている。その他に北部における修道院とその役割、教区の問題、あるいは郷の集会和嘆願書などについての分析がある。郷のミールは「君主の事柄」から「ミールの事柄」までさまざまな問題についてモスクワ政府に嘆願書を送ったこと、当時のモスクワの官庁は民衆から「切り離されたピロシキ」ではなく、その回答は一般に好意的であったことなどを明らかにしたのである。

以上のようにボゴスロフスキーは北部ロシアに焦点を当

て、郷と農民の在り方、修道院と教会などに注意を払いながらも、主な関心はその地方自治、ゼムストヴォと国家との相互関係の解明に向けられた。その意味では一七世紀ロシアは転換期に当たると。つまり動乱時代を境として、「専制・地方体制」から「専制・官僚体制」つまり中央集権制への移行が始まった。したがって近代ロシアは地方機関の衰退によって特徴づけられる、というのが彼の基本的な見解である。

ボゴスロフスキーは、こうして「中央と地方」の関係を鋭く分析したその二冊の名著によって近代史研究の最前線に立った。『地方改革』はビョートル改革期における地方の状況を全国的な視野のもとに解明したのに対して、『地方自治』ではロシア北部に地域を特定して、国有地の郷とゼムストヴォと国家との関係を全面的に分析したのである。地方に焦点を当てるといふ、その点では『一七世紀の外モスクワ地方』と一八世紀地方行政史を著わし、同じくクリュチェフスキー学派の後輩であったЮ・B・ゴーチエ(一八七六—一九四三)も基本的に同じであった。ロシア史における「中央と地方」問題の具体的な解明が当時の学会の中心的な課題となっていたのであり、歴史家の眼は地

方に向けられていた。その課題と最も精力的に取組み、大きな業績を残したのがボゴスロフスキーであった。

一九一〇年ボゴスロフスキーは、クリュチェフスキーの後任としてモスクワ大学ロシア史講座の教授に就いた。こうして教育研究の要職に就いた彼は、その後も倦むことなく仕事を続けた。今度はビョートル大帝の伝記研究であり、幸いにもこの研究は没後五巻本に纏められ、刊行された。『ビョートル一世』(一九四〇—一九四八)がそれである。

だが一九一七年の「十月革命」は、彼の環境を大きく変えた。権力を握ったボリシェヴィキは大学を改組して、歴史教育の場から旧教授陣を一掃したからである。彼と同僚たちは精神的にも経済的にもきわめて不安定な立場に置かれた。ボゴスロフスキーの地域史研究についての講演が行われたのは、そのような危機の時代であった。

二 「ロシアの地方史」

ボゴスロフスキーの論文は一〇ページ足らずの短いもので、要約するとはんの十数行に纏められる内容である。けれども以下では出来るだけそのニュアンスを伝えるために、言わずもがなと思われる点も省略することなく、翻訳に近

い形で紹介することにしよう。全文そのままではなく、また筆者の誤解が全くないとは言えないのだが、論文は次の四点にまとめられる。

① 地方史への関心は二重にある、と私は思う。第一に、

この関心は私たちすべてのものに備わる感情によって方向づけられている。不正確な言葉かも知れないが、それは私が「郷土愛」と呼ぶ感情によって引き起こされる。「郷土」(ロージナ)、「生地」への愛というこの感情は私たちの誰にもあるものだが、「郷土」という言葉自体、二重の意味で用いられる。それは「祖国」という言葉と重なり、共通の意味で用いられるが、もちろんこのような理解は「啓蒙的な階級」「読書する人びと」に手頃なものである。庶民のなかでは、「郷土」という言葉は、はるかに狭く理解されている。それによって意味されるのは、

生地、出身地、子供の頃の思い出と結びついた場所など、私たちが「故郷」(ロードナヤ・ストラナー)という言葉でもって呼ぶところのものである。ここに庶民の愛が現れている。「郷土愛」というこの感情は、第一にこの「地域」のために現在の福祉と将

来の繁栄を望むという点に現れており、「地域」の繁栄のために働く地方活動家はこの感情によって動かされている。他方で、「郷土愛」は、また生地の過去の運命、その歴史への関心をも引き起こす。啓蒙されていない庶民においては、過去への関心は「地域」の過去についての言い伝え、あるいはさまざまな伝説などに見られる。これに対して啓蒙された人びとにあっては、同じ感情が「地域」の歴史、生地の過去の運命についての歴史的探求という関心を引き起こすのである。

このように地方史への関心は、生地への愛という無自覚な感情、私たちが結びつけられているところの「地域」の過去の運命を知りたいという、私たちのなかに深く根差している要求に導かれている。けれども第二の原動力は学問的な要求であり、それは地方史を歴史学一般のはなはだ重要な分野として位置づけるものである。学問的な観点からは、地方史の研究は二重の意義があり、二重の関心に支えられている。第一に、地方史の探求はすでに承認されている一般的な命題、一般的な結論を補強することに

なる。つまり一般的な命題は、地方史の諸研究によって新たに確認を受けることになるのであり、地方史のなかに己の確認を見出すのである。例えばベロオーゼロ地方の勤務人の土地所有についての研究を取り上げる。勤務人の土地所有とその意義の問題は、すでに説明されており、十分に確立されたものだが、一つの「地域」の枠内でのこの問題についての特殊研究は、以前に言われていたことを点検し、手に入れられた結論の正しさを今一度確認する。けれども学者たちを地方史に駆り立てる別の学問的理由がある。私たちの歴史の一般的な過程は、大河が個々の小さな支流から形成されているように、個々の地方の過程から成り立っている。そうした個々の地方の歴史的、経済的、慣習的、文化的などの諸現象にみられる各地の特殊性についての観察が、その後の全体としての歴史過程の共通の軌道として固められるのである。私たちの結論は、もしそれが学問的な基礎があると主張するのであれば、個々の地方についての観察の上に打ち立てられなければならない。それらの地方的観察が存在する場合にのみ、

私たちの一般的立論が信頼され、正しいものとなるのである。

②

私たちの歴史学は、けれども過去に地方史、つまり「地域」の歴史の観察を蔑ろにするという過ちを犯した。一九紀半ばから私たちの歴史学ではソロヴィヨフと彼の教えに近いカヴェーリン、チチェーリンといった優れた法学者たちからなる「歴史法学派」が支配的であった。この学派は主にロシアの国家性、国家の起源と体制、その中央と地方の諸機関、社会諸身分の起源と権利など一般に法の歴史に入る諸問題に関心を持った。この学派は、その後社会諸階級の運命、国家の社会経済的構造に着目する「社会学派」と呼びうる流派に取って代わられた。最近の歴史学のこうした二つの流れには、一つの共通の欠陥がある。それは法学、政治経済学、そして社会諸科学に支配的な一般的な理論から出発して、一般的な命題を打ち立てるけれども、個々の地方の多様性については観察が不十分で、ときには全くウヤムヤにしている。カヴェーリンが氏族慣習の理論を立てるとき、チチェーリンが地方行政機関について議論す

るとき、一般的な概念でもって作業をしている。したがって現実の生活がそうしたシエーマに収まらないこと、地方には多様性があることを忘れているのである。チチェーリンは一七世紀の地方長官(ヴォエヴォード)と彼らの権力、権限、意義などについて議論するとき、彼は地方的な差異を「無視できる例外」としている。そこではモスクワ国家、つまり一五世紀からピョートル改革までのロシアの一般的な性格がまったく忘れられている。モスクワ国家は歴史的に形成されたものであり、一度に、また統一された一つの方式で形成されたものではない。それは長い困難な過程を経て形成されたもので、「中心の核」とその周りに「地方的な特殊性」を帯びた個々の「地域」が無限の多様性において配置されていたのである。モスクワの成長によって「全ロシア」がその周りに集まるに際して、地方の特殊性は十分に生きており、それは長く維持されていた。モスクワ政府は様々な規模と形、特徴、あるいは色彩を持つ地方を一つの型に嵌めこもうとはしなかった。それ故モスクワ国家の地図は大きな斑、複雑で細か

なモザイクを呈していたのである。

ここで私は、住居、衣服、家具、各種の儀式、慣習といった、長期にわたって特殊性を保持している民俗学的な諸現象について述べているのではない。行財政のような社会生活の側面を取り出してみても、モスクワ国家では地方毎に、その形成が多様性を持っていた。行政制度と課税組織がまったく同じ郡は一つもないと言いうことも出来るのである。郡だけでなく、個々の郷(ヴォーロスチ)は自己の特別の行政機関、社会体制、財政組織などを持っていた。ある郷ではある課税単位が用いられているが、他の郷ではまったく別の単位であった。地方自治組織についても同じことが言える。このようにピョートル大帝までのモスクワ国家の体制は、一八世紀末のフランス革命によって一掃されたアンシアン・レジームと呼ばれる体制によく似ていた。フランスでも各プロヴィンツィアはロシアと同じモザイク、同じ独自性を持っていた。規模もさまざまで、大きなプロヴィンツィアと並んで、小さなそれがあった。それらすべてが、各地方の封建的な特殊性を長く保持し

できたかつての独立した、政治的な纏まりであったのである。これら全ての歴史的多様性を消滅させたのは、革命が実施した理性的で合理的な原理に基礎をおいた一様な組織による置き換えであった。当時フランスは、規模、住民数、行政と裁判組織においてまったく同一のデパルトメントに分けられた。まったく同じ水準化、簡素化はわが国でも為された。それは一種の革命であったが、「下から」ではなく、「上から」行われた。ピョートル大帝の改革である。改革は、一般に一八世紀ヨーロッパ諸国を奮い立たせ、革命に流れこんだフランスよりも早く作用するようになった原理の名の下に実施された。それはフランス革命が特徴として持っていたと同じ合理的な性格を持つものである。ピョートル大帝は理性の名において行動した。それは共通の一つの概念、厳格で論理的な分割を求めるが、地方の歴史的成り立ち、多様性を容認しないのである。こうしてわが国ではピョートルの時代から全体に一律な秩序が導入されることになった。一律の県、一律のプロヴィンツィア、一律の郡への分割、そして一律な行政、裁判、

③

財政組織が導入されたのである。こうした国家体制の外面的な改革にもなつて、内部の地方的特殊性が廃り、消え失せなければならなかったのである。一九紀後半のわが歴史学は、その歴史法学的と歴史社会的な傾向においては、一般的な概念とイデーに関心を寄せていたから、たしかに地方の現象、地方の特殊性と多様性の研究には十分な力を割いてこなかった。けれども後者についても、少なからずのことを為したのである。次に地方史の研究について私たちが為した成果について簡単に概観することをお許し戴きたい。ここでは古くにモスクワ国家の構成に入った地方以外の、現在自治を享受しているか、自立的な政治生活を営んでいる地方、つまりマロロシア、リトヴァ、ベロロシアのような地方、そしてフィンランド、カフカース、トゥルケスタン、中央アジアの領土などについては言及しない。これらの地域は、以前にも自分の歴史家を持っていたが、いまその歴史研究は早いテンポで進んでいる。私が取り上げるのは「大ロシアの核」で、一五世紀から一七世紀末までのモスクワ国家である。より融合した、

より統一的なこの国家の領域のなかで、地域についての研究が的確に行われてきたのである。モスクワ国家で採用されている行政的区分は、個々の地域の習慣的な特殊性に基づくものだから、その点でますます便利なのである。一七世紀の政府はモスクワ国家を「中央」つまり「外モスクワ地方」、「沿岸」あるいは「沿岸の諸都市」、「ヴォルガ沿い」あるいは「ヴォルガ沿いの諸都市」などの地方に分けている。まず「中央」は現在のモスクワ県とそれを囲む輪で、隣接する諸県が「外モスクワ地方」と呼ばれた。言葉の起源は「モスクワ川の向こう」ということで、ロシアの古くからの諸地方がここに入る。最近この地方はゴーチエという研究者を見出した。彼の本のタイトルは『一七世紀の外モスクワ地方』である。

この「基本的な核」の周りにモスクワ国家の他の広大な領域が隣接している。「沿岸地方」に入るのは、アルハンゲリスク、オロネツ、ヴォログダの一部、ベルミ、ヴァトカの諸県である。この地方もまた己の歴史家を持った。ヴァトカ地方の歴史については著名な考古学者スピツィンの著作があり、ペ

ルミ地方に関してはシションコとドミトリエフの著作がある。私もまたこの地方の運命について関心を抱き、『一七世紀ロシア北部の地方自治』というささやかな本で、その社会的様式、行政組織、自治的な諸組織の考察に努めた。「ヴォルガ沿い」はモスクワ国家の東部地方を指すが、この地方もベレチャコヴィチという己の歴史家を持っている。『一七世紀から一八世紀初めのヴォルガ沿い地方』がそれである。かつて政治的に強力で、富裕な中心地であったノヴゴロドとブスコフの歴史に関しては、コストマーロフの『北ロシアの民主政治』とニッキキーの『ブスコフ内部史概観』などがある。スモレンスクと南部の地域、トゥーラ、リャザン、モスクワ国家のステツプ辺境の歴史についても、ミクラシエフスキーとバガレイなどの著作がある。

モスクワの行政当局は、いま挙げた地域を区分するに当たって、各地域に特有の民衆の慣習における特殊性に留意した。例えば北部では、いま最も際立った特徴だけを短く述べると、他のところと異なるのはとりわけ農奴制の欠如である。北部は農奴制

のくびきを知らない自由な農民が入植したところで、農奴制の不自由のあらゆる重荷を担っていた南部地方の農民とは全く別の性格を保持していたのである。

さらにここは広大な土地を持つ多くの修道院の存在によっても際立っている。この地方で農民たちは自治的な諸機関を発展させたのである。モスクワ国家の中央は、大世襲領と封地が支配的な地方である。ここには一六一一七世紀のモスクワの身分の高い大貴族たちの大領地が集中していた。農奴制が作用しているが、個々の大世襲領では農民自治を許すような特別の農奴制である。最後に南部のステップ諸郡は、クリミアのタタール人の攻撃からこの地域を守る小勤務人によって入植された。これらの諸郡は自己の生存のための永続的な戦い、永続的な危険という状態にあったのである。ここにはタタールの侵略から国家を守る目的でもって、一連の軍事的な防衛施設、防衛線ができています。この地方では勤務人の小さく零細な封地が支配的で、最も過酷な農奴制が発展したのはこれらの小封地においてである。以上のように各地方は自己の特別な社会的、経済的、慣

④

習的な違いを持っている。モスクワ政府が行政区分をしたとき、このような多様性も考慮していたのである。

ロシアの歴史学は、いま挙げた個々の地方に関して少なからず仕事をしてきた。私は最も大きな著作を列挙しただけで、小さな著作、論文、文献は多いのである。にも拘わらず、この仕事はそれが達成されなければならぬ地点まで到達していない。したがって今後これまでに生きいきとしたテンポで続けられなければならない。ここで私は四つほどの希望を述べたい。第一に、個々の地方、地域に関して、それらがどんなに小さくとも歴史研究にとって本質的な意義を持つ民俗的な諸資料、古文獻、各種の歴史記録の類を蒐集しなければならぬ。そしてその蒐集と集められた諸資料の研究とが最も密接なかたちで結びつかなければならない。そのなかから「地方のスタリナー」が私たちに響き、そして顔を覗かせたのである。これらの蒐集が中断されるのではなく、続けられ、普及して活発なテンポで進められることが望まれる。次により高度な段階として、資

史料についての学問的な考察をして個々の地方の歴史についての学術書の作成がある。私の経験では、それは他の研究者によっても共有されているものだが、ロシア史に関する一般的なテーマについて書かなければならないときがある。その際これらの地方的諸研究という土壌に足を付けていると感じるとき、揺るぎない歩みでもって進むことができる。けれども前提となる地方研究がないとき、歴史家の課題ははなはだ複雑なものとなる。地方的調査が彼に与える確信がないからである。土壌から足が離れて、いかなる支えもなく空中にぶら下がっているような感覚を持つのである。地方の歴史についての学問的研究、これを私は第二に希望するものである。更に私は、これら地方研究の奨励の必要性、つまりそれをより可能性あるものとし、それに運動の性格を付与するような制度の必要性を提案する。私はいろいろな地域の歴史に関する調査研究を自己の課題とする地方学術団体を考えている。このような団体として私たちの下には、「県学術古文書委員会」や「地方古文献並びに民俗協会」という組織があった。それ

らの仕事は、とりわけ地方史家の力を結集し、それに共通のトーンを与える関係において、はなはだ有益だと考える。地方、地域の歴史の調査に自己の活動を捧げる人びとに対して、この希望を伝えたい。

結びに、第四の希望を述べたい。個々の地方についての資料の蒐集、その資料研究、そして学術書の作成といった私たちの仕事は、地方の分離主義をもたらすことになってはならない。ピョートル大帝の改革まで存在したモスクワ国家の枠組み、ロシアが集められたその「核」の分散を招いてはならないからである。熱中しすぎて地方愛国主義者になったり、共通するものと全体について忘れてしまうことがあってはならない。数世代、また辛い労働と困難な数世紀のなかで、モスクワ国家つまりモスクワの周りに統合された私たちの祖先は、なんらかの高尚なイデオロギーによって、あるいはなんらかの理論的考えで行動したわけではない。そうではなく、深刻な必要性という下で、とりわけモスクワ国家をそれを取り巻く外敵から防衛するというプリミティブな要請の下に、更に経済的な必要の下に行動したので

ある。それは私たちが今も生きいきと感じる、はなはだ本質的なものである。私たちは自己の生地を愛し、その過去の運命の探求に力を注ぎながらも、「祖国」をその全体において、その高く共通の概念において愛さなければならぬ。祖国の幸福、偉大さ、栄光についての思想を手放さないために、郷土愛を育みながらも、それを分離主義に追いやつてはならないのである。

三 県学術古文書委員会

ボゴスロフスキーの論文はきわめて明快で、改めて解説するまでもないだろう。かつてロシアの歴史学はシエーマに囚われる余り、地方史研究を蔑ろにしてきた。ピョートル以前のモスクワ国家にあっては、地域の多様性が著しいものがあり、それを無視することは出来ないにも拘わらず、この点に自覚的に取り組まれてこなかった。もとより若干の貴重な業績が生み出されたが、勿論これでは不十分であり、更により一層進められなければならない。一般的な歴史学、歴史叙述は各地の地方的研究抜きにしてはしっかりとした基盤に立つことが出来ないからである。

こうした彼の指摘はそのまま現代の歴史研究にも通ずるところである。

ところでボゴスロフスキーは、最後のところで「地域の歴史に関する調査研究を自己の課題とする地方の学術団体」について述べている。その例として、かつて「県学術古文書委員会」と、「地方古文献並びに民俗協会」という組織が存在したことを指摘しているのである。ここで問題となるのは特に前者だが、これは一体どのような組織なのだろうか。この点はロシアの地域史研究の歴史と密接にかかわる問題であり、またボゴスロフスキー論文の前提でもある。最近のマカリヒンの研究に拠りながら整理することにしてしよう。

ロシアの地域史研究の起源は一八世紀後半に求められる。その前提としてエカテリーナ二世の地方行政改革によるヨーロッパ・ロシア五〇県の成立、そして彼女の啓蒙政策が挙げられる。各地で地方の歴史と文化に対する関心が芽生えてきたのである。代表的な例を挙げると、ヤロスラフ県ではロシア最初の地方誌『僻遠のポシエホーニエ人』が刊行され、『イーゴリ軍記』が発見された。ヴォローネジ県ではヴォルホヴィチノフによって本格的な地域研究

『ヴォロネツ県の歴史、地理並びに経済の記述』が著わされた。一九紀に入ると国家機関によるさまざまな地方調査が盛んになるが、「地方史」は非専門家の領域として残された。幾つかの興味深い地誌が著わされ、なかには才能ある人物が現れたが、善し悪しは別にして、それらは地方への愛着とディレッタンティズムと絡み合っていた。学術的な地域研究となると、やはり一八六〇年代の「大改革の時代」を待たなければならぬのである。

「大改革」とその後の十年における社会的並びに精神的な昂揚、県統計委員会の設立と地方レヴェルでの人材の育成、そして社会運動に対する政府の部分的譲歩、このような条件の下に一八八四年四月の勅令によって、県学術古文書委員会(ГВАК)の設置が認められた。これは当初トヴェーリ、リヤザン、オリョール、そしてタンポフの四県に設置されることになったが、一八八〇年代後半には更に5県、最終的には三九県に設置されたのである。「当面の事務に必要とされない、だが多かれ少なかれ歴史関係において重要な記録と古文書の集中と保管」、これが設置の目的であった。県知事がその常任監督官となり、県委員会の活動は毎年、それを統轄するペテルブルクの帝国古文献委

員会に報告されなければならなかった。そもそもその設立の最大の功労者はこの委員会の議長H・B・カラチョフで、彼は著名な学者にしてアカデミー会員であった。

県委員会の中心的な課題は、もちろん歴史史料の蒐集であった。県や郡といった行政機関の諸文書を始めとして、家族や個人の諸文書、地域と関わりのある社会経済的諸史料など、主に文書史料であった。それらは地方史だけではなく、もちろん「一般史」にとっても重要であった。かくて一九一七年までの三〇年間にわたって膨大な史料が蓄積されたが、蒐集だけが委員会の仕事ではなかった。貴重と思われる史料は、一部印刷・出版された。また三九の県委員会のうち、二九の委員会で名称はさまざまだが『論集』を出していたが、その他に学問的あるいは通俗的な本や冊子を出版した。全体として見ると、出版に占める歴史史料の割合は一五パーセント程度で決して大きくはなく、むしろ歴史の研究と概説に関するものが少なくない。確かに委員会の目的は「古文書の蒐集」にあったが、会員たちは「学術」という言葉に共鳴していた。委員会は「学術的な目的を追求する機関」と理解されていたからである。他方で県委員会には聖職者も参加していて、彼らの役割は小さ

くなかったが、教会や修道院そしてその歴史に関する出版は多くはなかった。教会など聖界については別の機関と刊行物があったことにもよるが、県委員会は基本的に宗教と分離されていたのである。

県委員会が特別の注意を向けたのが当該地方へのスラヴ人・ロシア人植民という問題であった。これは歴史に対する地域住民の自然かつ第一の関心であるが、そうした植民、ロシア化、そしてキリスト教化などの問題に対して強い関心が向けられ、考察の対象とされた。その他にも考古学的発掘調査もまた委員会の重要なテーマとなった。ヤロスラフ地方では著名な考古学者がクルガンの発掘に参加した。またニジエゴロド郡では一九一一年に伝説上の町キーテジを求めて、スヴェトロヤール湖での発掘調査が行われたのである。

その他に注意しておかなければならないのは、県委員会と中央との関係である。委員会は帝国古文獻委員会の管轄下にあったから、所属する学者たちとの交流も見られた。特にペテルブルク大学教授C・Φ・プラトノフは、トヴェーリ、ニジエゴロドなどの県委員会にしばしば招かれて、連続講義をした。また地元の研究者とともに史料蒐集

に当たるなど協力関係にあったのである。帝国古文獻委員会とプラトノフとの深い関わりからくるものだが、この点でモスクワ大学とは間接的な域を出るものではなかった。

以上はごく簡単な整理だが、これだけでは落ちこぼれる問題も少なくない。そこで具体的にヤロスラフ県学術古文書委員会を取上げて、もう一步踏み込んで委員会と仕事の性格を検討することにしよう。この県委員会は一八八九年一月に開設された。県知事にして委員会の監督ボリス・シュトゥルメルは、後に「県のすべての学術力とすべての研究者」を結集したと述べたが、ヤロスラーヴリの町には著名な大学があった。一九紀初めに「鉾山王朝」デミドフ家の寄付によって開学した「デミドフ法学院」がそれである。委員会の議長には法学院の正教授が就任した。県委員会は最初の一〇年間で多くの文書史料を集めるとともに、二つの『論集』の刊行、一五〇〇の古銭のコレクション、五万冊からなる図書館の設置など順調にすべり出した。ヤロスラフ県知事は民衆啓蒙という点に力を入れていて、県の学齢期の子供たちの読み書き率は、この時期にすでに一〇〇パーセントに近づいていた。一八九九年のプーシキン生誕百年記念の集会で県知事は、「ドイツではゲーテの一

五〇年記念に農村住民がかれの著作をほとんど知らないのに、わが偉大な詩人の作品を半分の農村住民が知っている」と自慢した。それに対して県委員会の議長は、自分たちの活動が小さな息苦しい部屋で行われており、この一〇年間で働いていた一四人のうち六人が減った、と指摘している。「人がいない」というのはロシア全体の声であったが、ヤロスラフでも事情は同じであった。

県委員会はさまざまな歴史文書を蒐集するとともに、それらのなかの貴重なものを一部出版に付したが、特に一七一―一八世紀のウグリッチ地方の諸文書についてはその歴史的価値が高いことが認められている。またヤロスラヴリの町の歴史に関する概説、この地方の修道院と聖堂の史料の出版などがなされた。そうした日常的な仕事の他に、さまざまな行事があった。一九一二年五月には県委員会が中心となって、「一六二二年の国民軍の到来」を記念する集会が催された。ポーランド軍に占領されていたモスクワの解放のためにポジャルスキー率いる国民軍が出陣した、その場所がヤロスラヴリであった。その記念集会のために各種の学術機関との連絡、史料の蒐集、小冊子の出版、さらに一年を通してロマノフ家のツァーリとその家族の到来

のために奔走しなければならなかった。

その他に、ヤロスラフ県委員会で知られているのは後の著名な考古学者B・A・ゴロドツォフの発掘調査である。彼は一八九六年にヤロスラフ郡のヴェリーコエ村近くのチョールナヤ・ゴーラでの発掘で古代の墓を発見したのを初め、墳墓やマンモスなどの発掘に従事した。また人びとの啓蒙活動にも積極的であったとされる。このように調査の中心は古い時代にあったが、ある研究員は農奴解放前夜のヤロスラフ県貴族委員会の活動を分析している。

こうして県学術古文書委員会は、地域とその文化的活動にさまざまな形で関わったが、もちろんその主な目的は古文書の蒐集、その出版と研究であった。各県の活動状況は決して一様ではなく、例えば『論集』の刊行数だけ取ると、最高はオリョール県委員会の五八冊だが、三冊以下が九県にのぼる。ヤロスラフ県は七冊であった。けれども共通しているのは委員会の劣悪な財政である。それは会員の会費、そして都市やゼムストヴォ、あるいは個人の寄付によって賄われたが、常時火の車であった。学術目的での出張、発掘調査、古文書の運搬などはもとより、複製や目録を作るにもお金がないという報告が多いのである。そして政府の

財政支援が始まる間もなく、戦争が勃発した。一九一四年に始まる第一次世界大戦へのロシアの参戦、そして「革命」は、地域研究という地味な学術活動の流れを断ち切ることになった。ロシアにおける地域史研究の拠点であった俱学術古文書委員会は、それ自体としては一九一八年でもってその活動を停止したのである。

以上のように、俱学術古文書委員会は、地方における諸史料の蒐集を目的とする団体として、「上から」設置された機関で、県知事がその後見人であった。こうした機関が他方に置かれた背景としては、地域の歴史と文化に対する住民の関心があるだろう。したがって全くの「官製」のものと言うことは出来ず、ある程度の自主性も認められる。委員会のメンバーが史料の蒐集以上に、研究活動に積極的であったといわれるのも、その点を示唆するものである。だが彼らの地域史についての調査と研究は「中央」、つまりアカデミズム史学に対抗することを目指していたわけではなかった。

ロシアのアカデミズム史学は、すでに一九世紀末には地域史（そして社会経済史）をその中核に据えていて、かなりの成果を挙げていた。ボゴスロフスキーやゴーチエの近

代史研究はまさにそのような性格を帯びていたし、動乱時代に関するプラトノフの研究もまったく同じである。この点は例えばドイツにおける歴史学とは対照的であった。ドイツの地域史研究は歴史的に自立的なラントを基盤として確立されたもの、つまり「ラントの歴史学」であった。「ドイツの歴史研究が国民的な規模での歴史叙述（政治史）とラント段階での地域史研究との二つの互いに拮抗しあう道の上で発展した」（阿部）とするならば、ロシアは歴史的にそのような「ラント」を欠いていた。ボゴスロフスキーは、先の論文でモスクワ国家の「地域的多様性」を強調したが、「自立性」を主張したわけではない。ロシアの「地域」は「ラント」とは基本的に異なるものである。そのことが逆に、ロシアにあってはアカデミズムの歴史家たちがいち早く地域史研究に取り組むという現象をもたらしたとも言えるのである。

結びに代えて

さて「十月革命」前における地域史研究の在り方とその性格について、ボゴスロフスキー論文を手掛かりにして検討してきたが、最後に革命後の動向について手短に見てお

くことにしたい。

ボゴスロフスキー論文は、はじめに指摘したように一九二一年一二月に開催された地域研究の全国会議での講演の記録であるが、実はこれはただの会議ではなかった。「十月革命」から四年が過ぎていたこの時期、ソヴィエト政権は「地域研究」を共産党の文化・啓蒙政策の重要な部門として新しく位置づけた。したがってモスクワ会議はこの新しい「運動」の発端となったのである。そこにはかつての「県学術古文書委員会」のメンバーがそこに参加していた。例えばサラトフ県からはC・H・チェルノフが代表として出席していた。一八八七年に設立されたサラトフ県委員会、一九二二年に「サラトフ歴史、考古学、民俗学協会」として存続していたが、一九二三年からは「ヴォルガ下流域地区地域研究協会」と改称して、その活動を再開した。伝統的な県ではなく、より広い地域を単位とするなど新しい方法が採用された。このようにして各地の協会が相互にコンタクトを取りながら積極的な地域研究活動に入ったのである。「中央のビュエロ」の議長にはC・Φ・オリデンブルクという著名な考古学者が就任して、一九二三年に『地域研究』が発刊された。こうして一旦消えた地域研究

は再点火されたのであり、C・O・シュミットは一九二〇年代を地域研究の「黄金の十年」と呼んでいる。その活動の詳細はここでは省かなければならないが、その火も一九二九年末に再び消された。「プラトノフ事件」として知られる古い非マルクス主義歴史家たちのページと関連して、地域研究者も連座したからである。

長年にわたって首都ペテルブルク大学の教授を勤め、ロシア史研究をリードしてきたプラトノフ等の旧教授陣を、「反革命組織」との関わりの嫌疑で追放したこの事件は、モスクワ大学でも多くの逮捕者を出した。そしてすぐに地方にも波及した。各地の協会の地域研究者たちが、実際に在りもしない中央の「反革命組織」との関与を疑われ、「反ソヴィエト的」のレッテルを貼られて、投獄されたのである。ペルヴヒンなどかつてヤロスラフ県委員会の活動を担い、ひき続き地域研究に従事していた多くのものが三年流刑の処分をうけた。「中央黒土地区地域研究協会」についてのケース・スタディによると、当初は一〇名、全部で九二名が逮捕され、処罰を受けた。特にヴォローネジ地域の研究者の処罰は、その規模と厳しさにおいて他を圧倒していた。(五人が銃殺刑、二人が獄死、残りは三一〇

年のラーゲリ送り)。

地域研究者は政治からは遠く、いかなる社会的特権をも持たない「地方文化の慎ましい献身者」にすぎない。何故彼らがそうした犠牲者となったのだろうか。再びシュミットによると、地域研究団体とそのメンバーの著作に見られるデモクラチックな表現は「十月革命」前の伝統に連なるものであったこと、また運動への彼らの参加はしばしば公式のルートを避け、統一された方法論について「指導者の指示」なしで済ましていたこと、このことがスターリン崇拜の時期の新しい傾向に適さなかった。強制的な農業集団化という全てが均一化されようとしていた時期に、地域研究者たちは「地域の独自性」を示すことを自らの責務と見なしていた。そうした彼らが「反革命組織」との関わりを問われてバージされたのは偶然ではない、というのがシュミットの指摘である。かくて古いもの、特に教会の建物や貴族の館などの大規模な破壊は、それらのなかに歴史と文化の貴重な記念碑を見て、その保存のために尽力した人びとの処罰をも伴ったのである。

こうして一九二九—一九三〇年、各地で地域研究者の「壊滅」「晒し刑」が進行した。そのなかにはかつての「県

学術古文書委員会」の多くの活動家たちがいた。『地域研究』は廃刊された。因みにボゴスロフスキーは、プラトーフ事件の始まる前の一九二九年四月に逝去したが、もし生きていたならば、間違いなく流刑者のリストに加えられただろう。

参考文献

- Акиншин, А. Н. Судьба краеведов. Концы 20-х начал 30-х годов. Вопросы Истории. 1992 No.6-7.
Боголюбовский, М. М. Областная история, ее научное обоснование и современные задачи. (1923) Отечествокраеведческий альманах. Вып.4 1983.
Бржостовская, Н. В. Деятельность губернских архивных комиссий по созданию исторических архивов. ТМГИАИ. Вып.5 1954.
Дубовый, В. Сельх, В. Н. В. А. Горолицы и Ярославская губернская ученая архивная комиссия. Вестник ЛГУ. Сер.2 вып.4 1986.
Козляков, В. Н. Севастьянова, А. А. Культурная среда провинциального города. Черки русской культуры.

- туры 19 века. Т.1 М., 1998.
- Макарихин,В.П. Губернские ученые архивные комиссии России Нижний Новгород, 1991.
- Раанцев,Н.П. Спаси живую старину—. Охрана памятников и музейное строительство в Ярославской губернии в 1918-1929 гг. Ярославль 2000.
- Севастьянова,А.А. Биография русской провинции второй половины 18 века. История СССР 1991 No.1
- Филимонов,С.Б. С.Н.Чернов—Историк и краевед. Отечество. Вып.5 1994.
- Харина,Т.И. В науке приятно быть и простым членом-работчим. М.М.Богословский. Истории России. 18-начало 20 века. М., 1996.
- Черепнин,Л.В. Академик М.М.Богословский. Отечествонные истории 18—19 вв. Сб.ст. М., 1984.
- Шведова,О.И. Указатель «Трудов» губернских ученых архивных комиссий и отдельных их изданий. АЕ за 1957 год. 1958.
- Шмигт,С.О. Археология.Архивоведение.Памятниковедение. Сб.ст. М., 1997.
- Шохин,Д.И. Московский архив Министерства Юстиции и русская историческая наука. Архивисты и историки во второй половине 19—начале 20 века. М., 1999.
- Reviving Local History. Russian Studies in History. 38 — 2 1999.
- 土肥恒之 『岐路に立つ歴史家たち 二〇世紀ロマンの歴史学への周辺』 山川出版社 二〇〇〇年。
- 阿部謙也 「ドイツの地域史研究」『地方史の思想と視覚』柏書房 一九七六年。
- (一橋大学大学院社会学研究科教授)